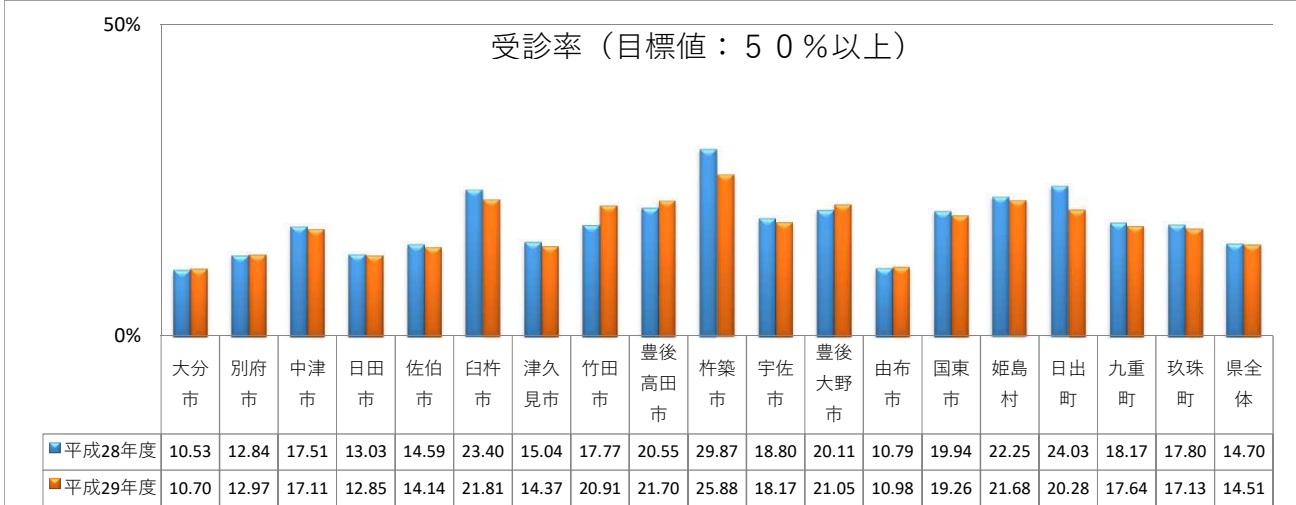


# 平成28年度、平成29年度 胃がん検診精度管理指標数値の調査結果

※居住市町村不明分を除く

## (1) 受診率(市町村別集計/住民検診・職域検診総集計)

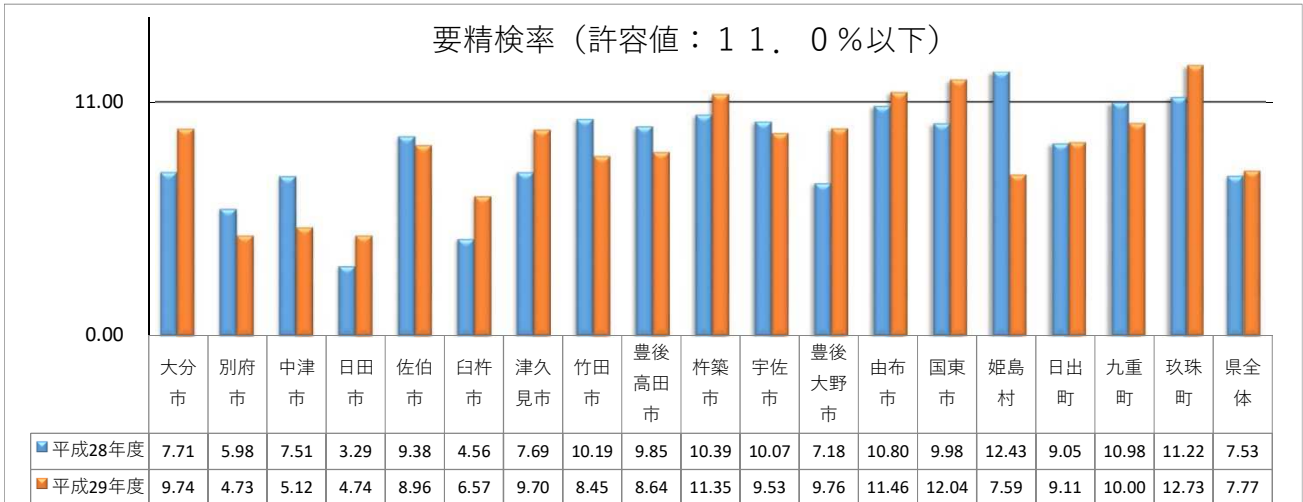
胃がん検診の対象者のうち、実際に受診した人の割合です。なるべく高いことが望ましいとされており、目標値は50%以上です。なお、居住市町村不明者については、除いているため、実際には記載している受診率よりも高い可能性があります。



## (2) 要精検率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

胃がん検診受診者のうち、精密検査が必要と判定された人(要精検者)の割合です。検診により、精密検査の対象者が適切に絞られているかを示します。0よりも大きく、一定の範囲内にあることが望ましい指標です。

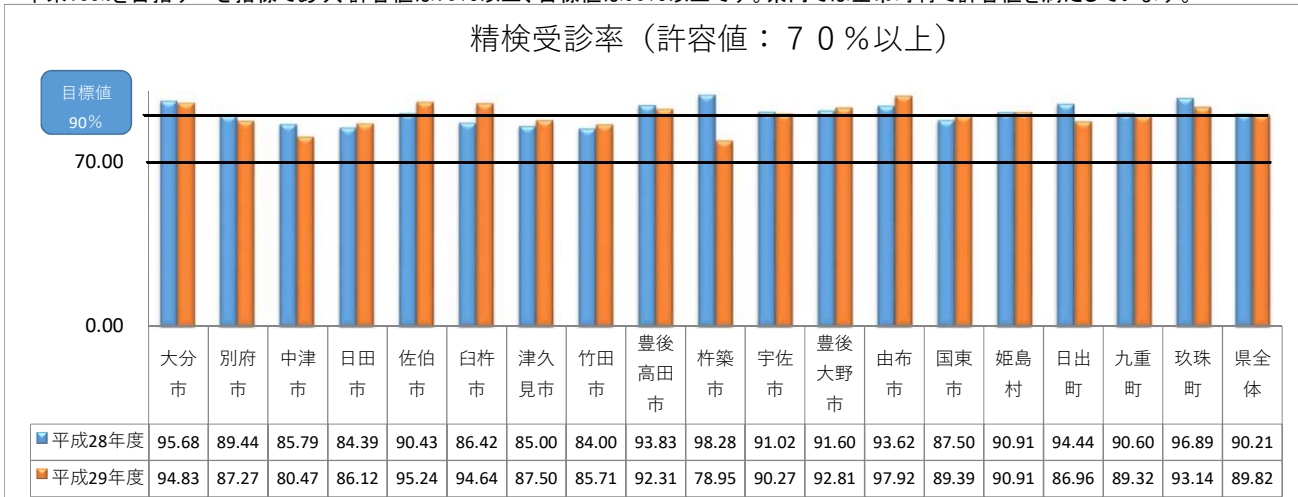
胃がんの許容値は11.0%以下ですが、有病率が高い地域(胃の病気が多い地域)では高くなる可能性があります。



## (3) 精検受診率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

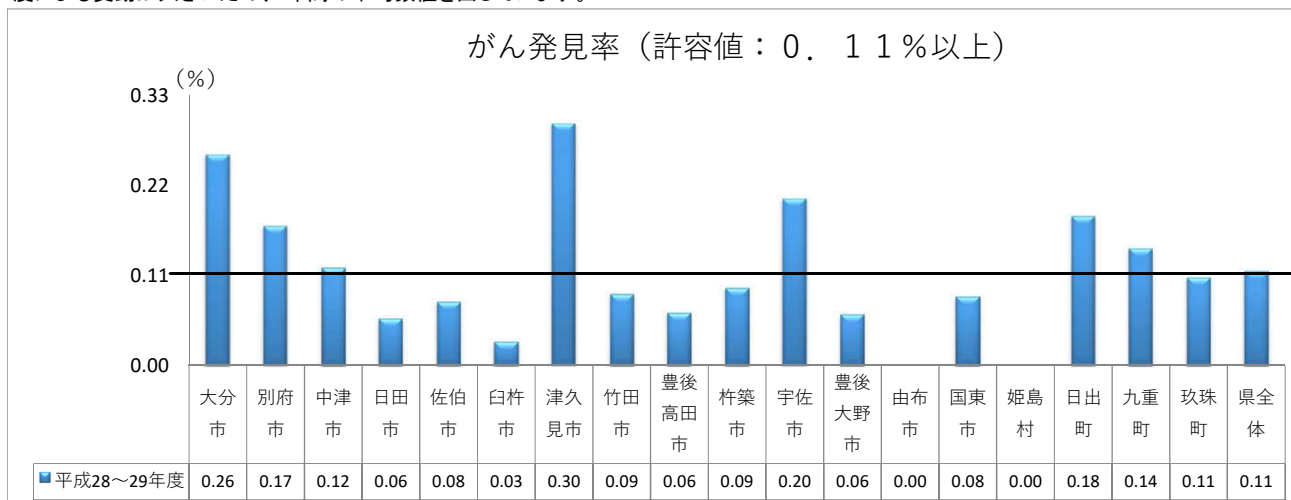
精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、精密検査を受けた人の割合です。要精検者がきちんと精密検査を受診したかを示します。

本来100%を目指すべき指標であり、許容値は70%以上、目標値は90%以上です。県内では全市町村で許容値を満たしています。



(4)がん発見率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

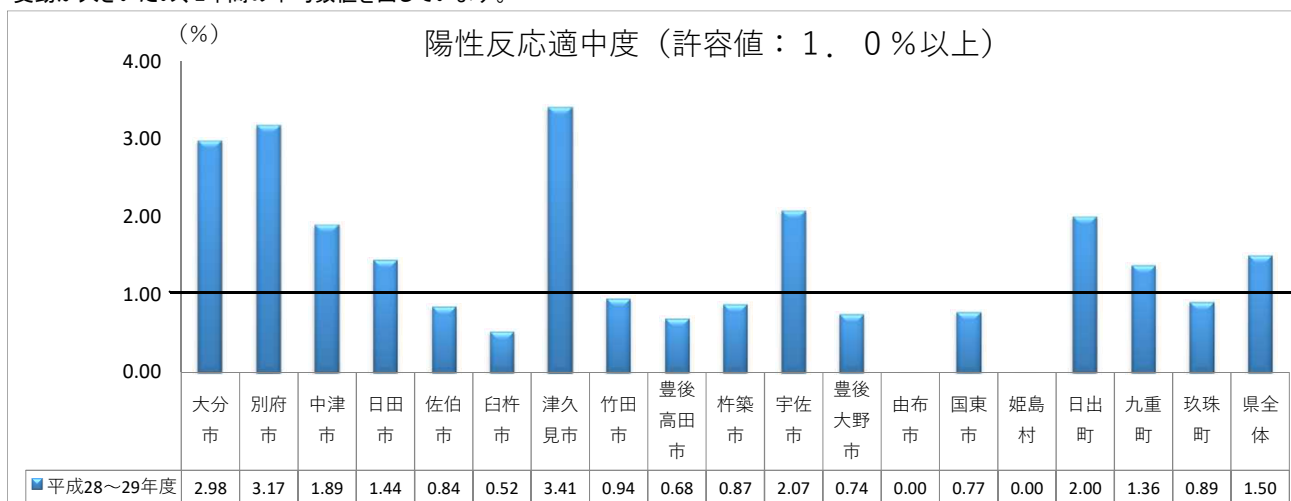
胃がん検診受診者のうち、胃がんが発見された人の割合です。適正な頻度でがんを発見できたかを示します。許容値は0.11%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。また、受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいので、2年間の平均数値を出しています。



(5)陽性反応適中度(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、胃がんが発見された人の割合です。検診で効率よくがんを発見できたかを示し、ある一定の範囲内であることが望ましいとされています。

許容値は1.0%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなることもあります。受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいので、2年間の平均数値を出しています。



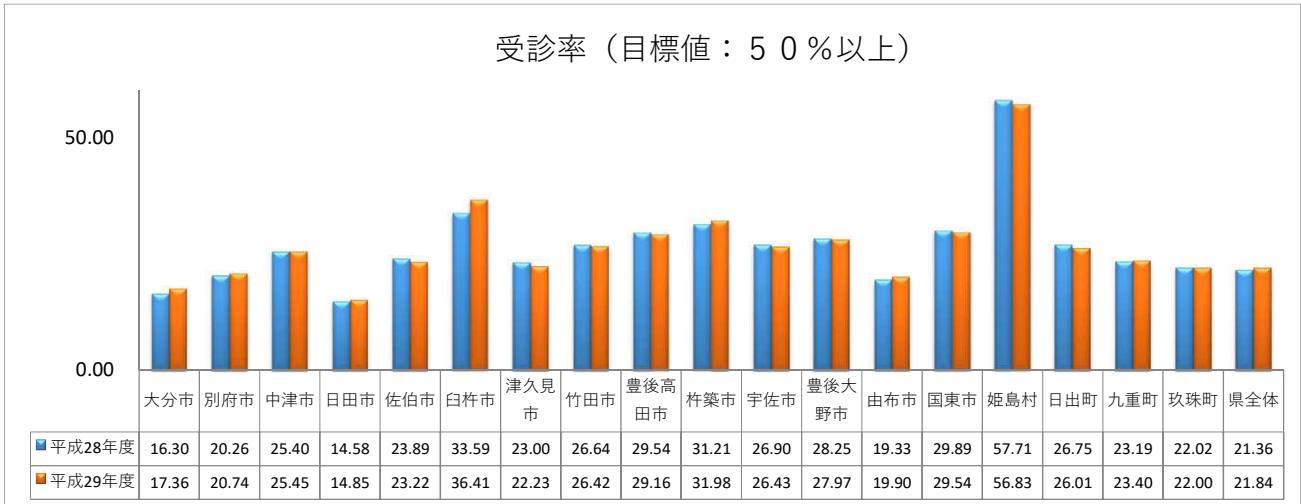
※厚生労働省「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について」の許容値・目標値を評価基準としています。

# 平成28年度、平成29年度 大腸がん検診精度管理指標数値の調査結果

※居住市町村不明分を除く

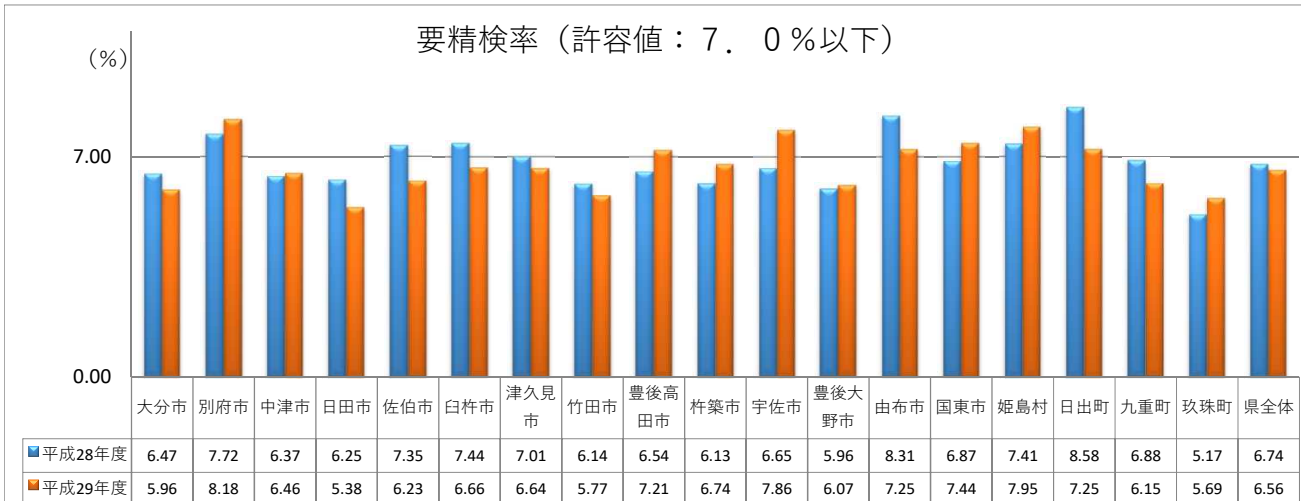
## (1) 受診率(市町村別集計/住民検診・職域検診総集計)

大腸がん検診の対象者のうち、実際に受診した人の割合です。なるべく高いことが望ましいとされており、目標値は50%以上です。なお、居住市町村不明者については、除いているため、実際には記載している受診率よりも高い可能性があります。



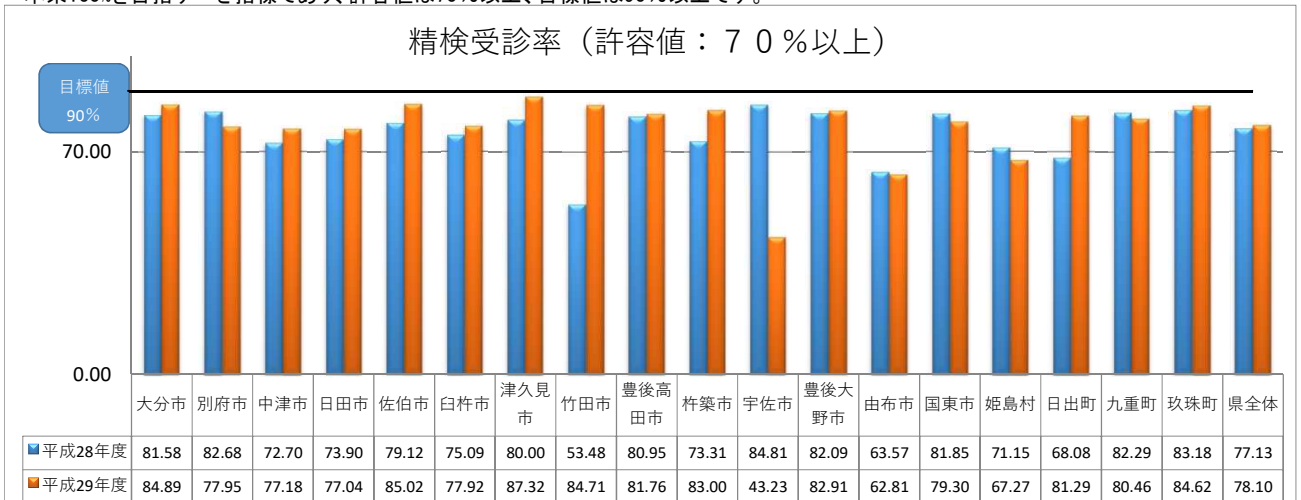
## (2) 要精検率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

大腸がん検診受診者のうち、精密検査が必要と判定された人(要精検者)の割合です。検診により、精密検査の対象者が適切に絞られているかを示します。0よりも大きく、一定の範囲内にあることが望ましい指標です。大腸がんの許容値は7.0%以下ですが、有病率が高い地域(大腸の病気が多い地域)では高くなることがあります。



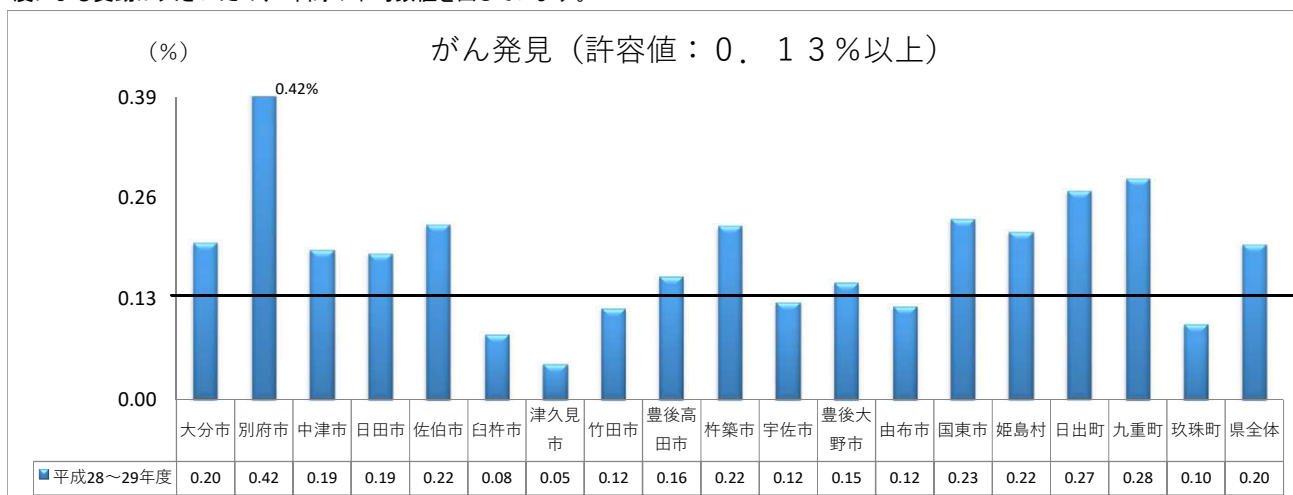
## (3) 精検受診率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、精密検査を受けた人の割合です。要精検者がきちんと精密検査を受診したかを示します。本来100%を目指すべき指標であり、許容値は70%以上、目標値は90%以上です。



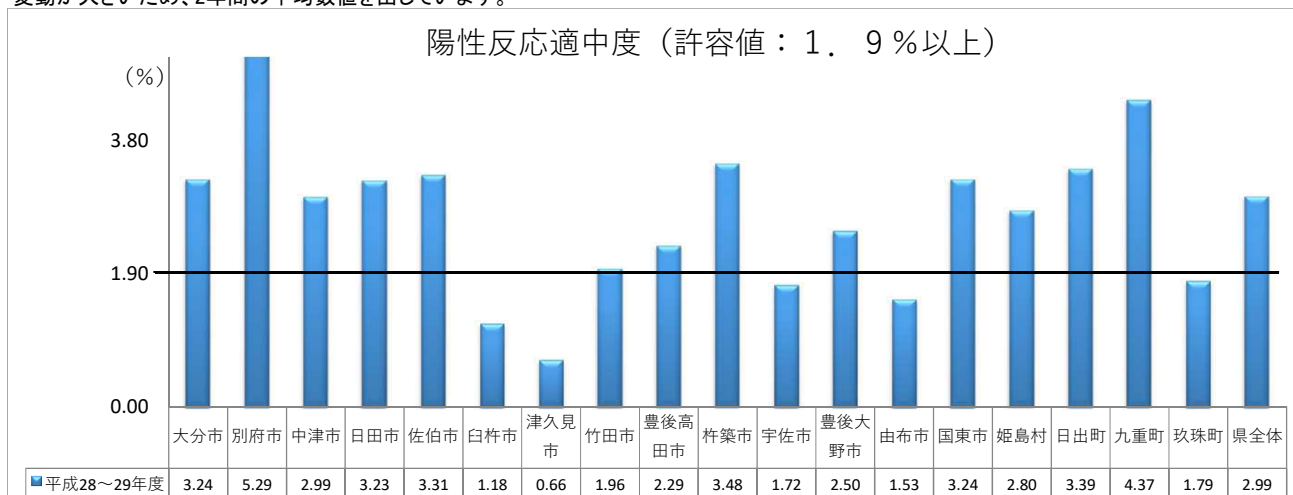
(4)がん発見率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

大腸がん検診受診者のうち、大腸がんが発見された人の割合です。適正な頻度でがんを発見できたかを示します。  
許容値は0.13%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。また、受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいため、2年間の平均数値を出しています。



(5)陽性反応適中度(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、大腸がんが発見された人の割合です。検診で効率よくがんを発見できたかを示し、ある一定の範囲内であることが望ましいとされています。  
許容値は1.9%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいため、2年間の平均数値を出しています。



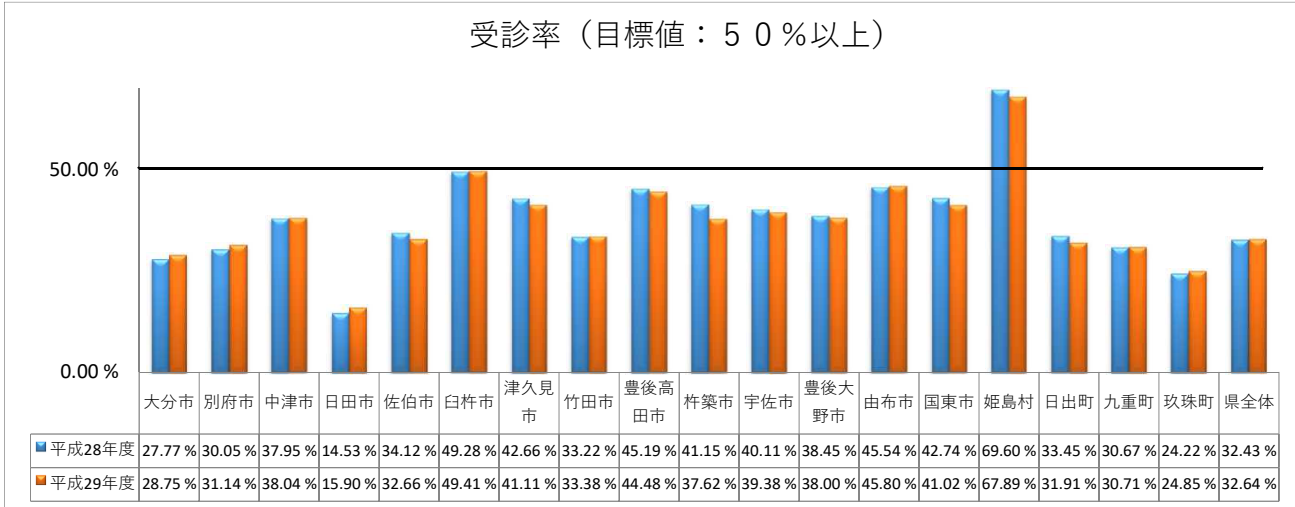
※厚生労働省「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について」の許容値・目標値を評価基準としています。

# 平成28年度、平成29年度 肺がん検診精度管理指標数値の調査結果

※居住市町村不明分を除く

## (1) 受診率(市町村別集計/住民検診・職域検診総集計)

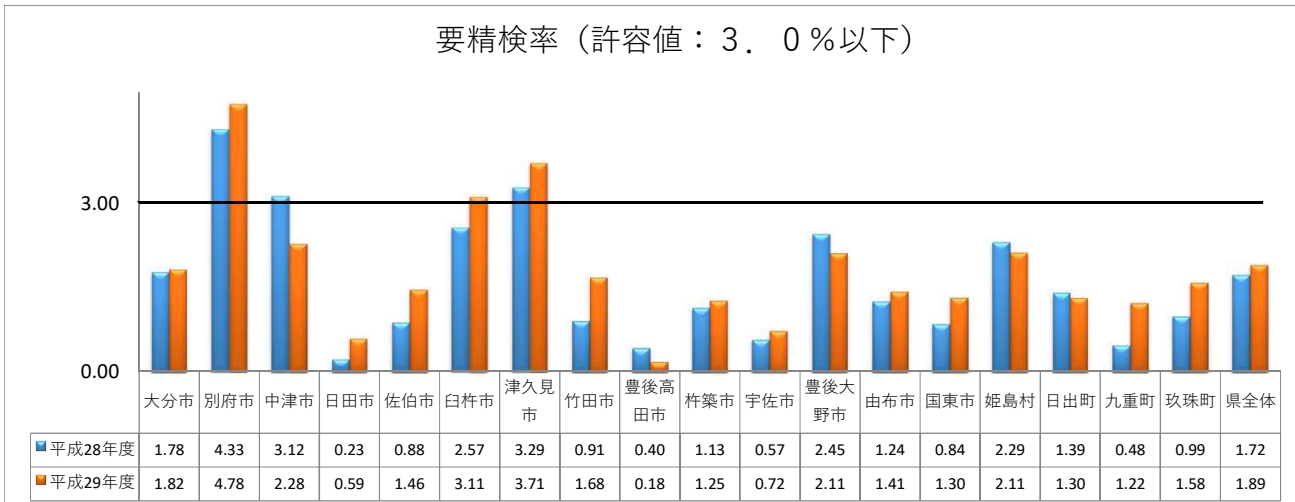
肺がん検診の対象者のうち、実際に受診した人の割合です。なるべく高いことが望ましいとされており、目標値は50%以上です。なお、居住市町村不明者については、除いているため、実際には記載している受診率よりも高い可能性があります。



## (2) 要精検率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

肺がん検診受診者のうち、精密検査が必要と判定された人(要精検者)の割合です。検診により、精密検査の対象者が適切に絞られているかを示します。0よりも大きく、一定の範囲内にあることが望ましい指標です。

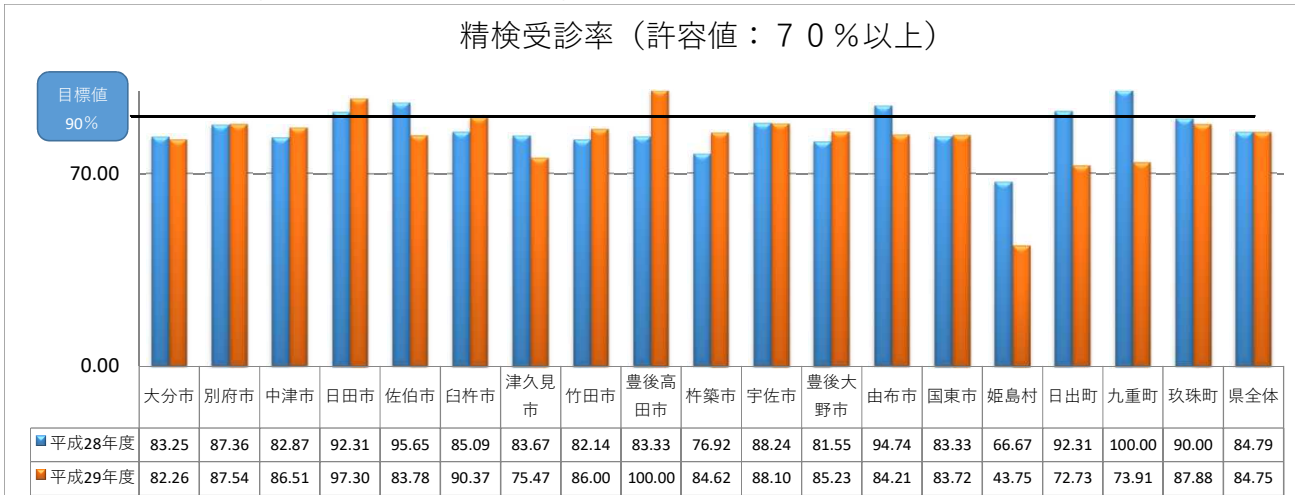
肺がんの許容値は3.0%以下ですが、有病率が高い地域(肺の病気が多い地域)では高くなることがあります。



## (3) 精検受診率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

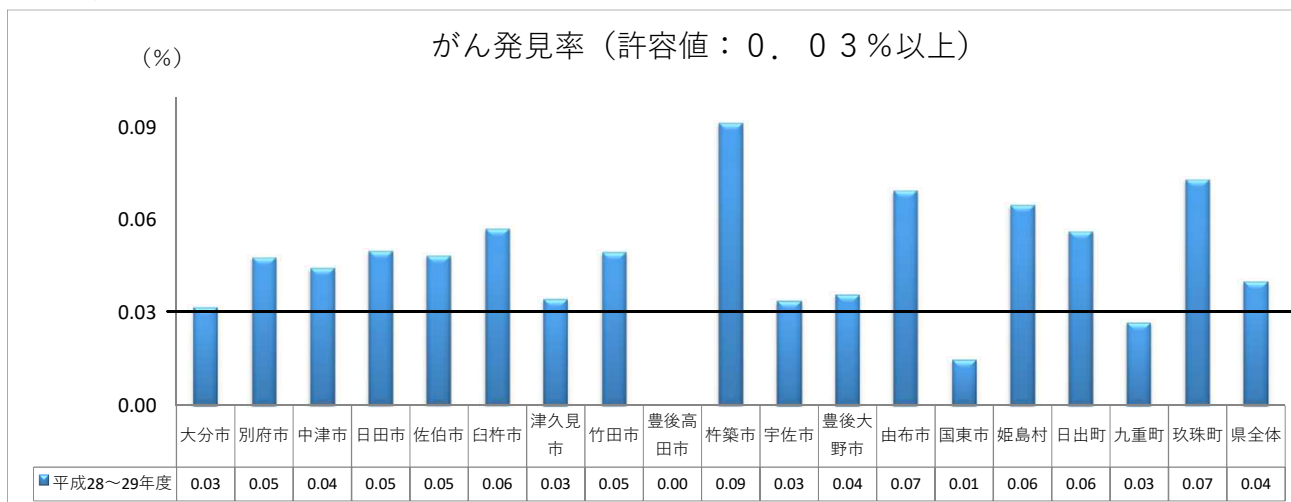
精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、精密検査を受けた人の割合です。要精検者がきちんと精密検査を受診したかを示します。

本来100%を目指すべき指標であり、許容値は70%以上、目標値は90%以上です。



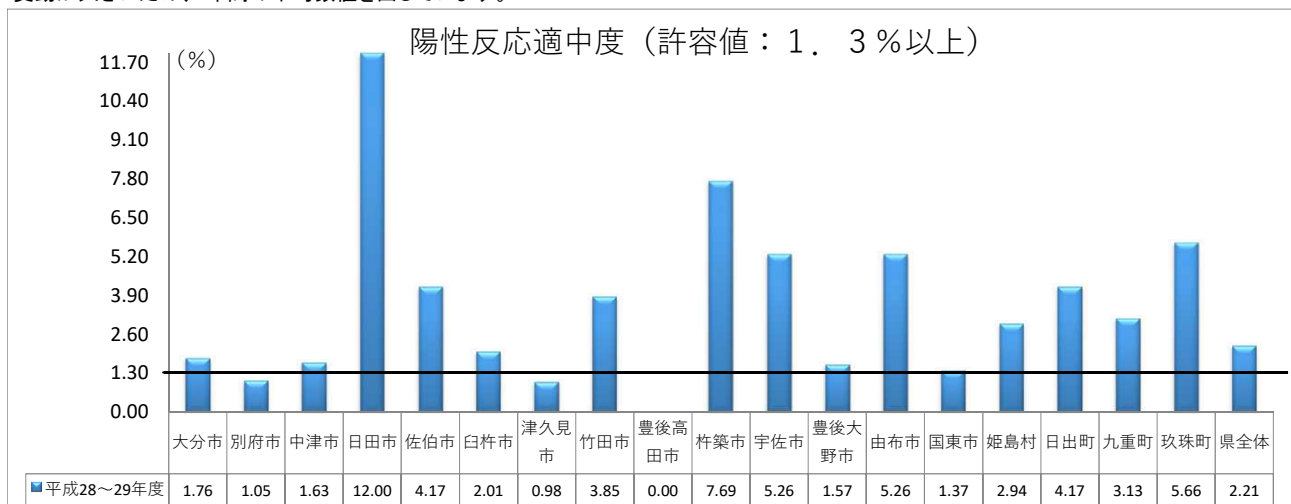
(4) がん発見率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

肺がん検診受診者のうち、肺がんが発見された人の割合です。適正な頻度でがんを発見できたかを示します。許容値は0.03%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。また、受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいため、2年間の平均数値を出しています。



(5) 陽性反応適中度(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、肺がんが発見された人の割合です。検診で効率よくがんを発見できたかを示し、ある一定の範囲内であることが望ましいとされています。許容値は1.3%以上ですが、若年者や女性の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいため、2年間の平均数値を出しています。



※厚生労働省「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について」の許容値・目標値を評価基準としています。

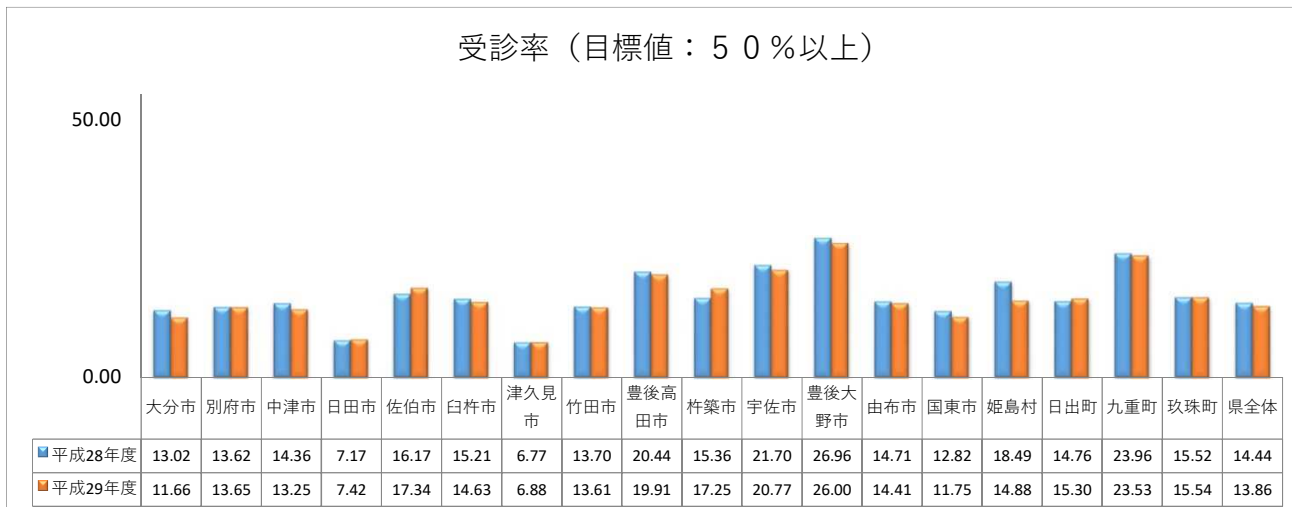


# 平成28年度、平成29年度 乳がん検診精度管理指標数値の調査結果

※居住市町村不明分を除く

## (1) 受診率(市町村別集計/住民検診・職域検診総集計)

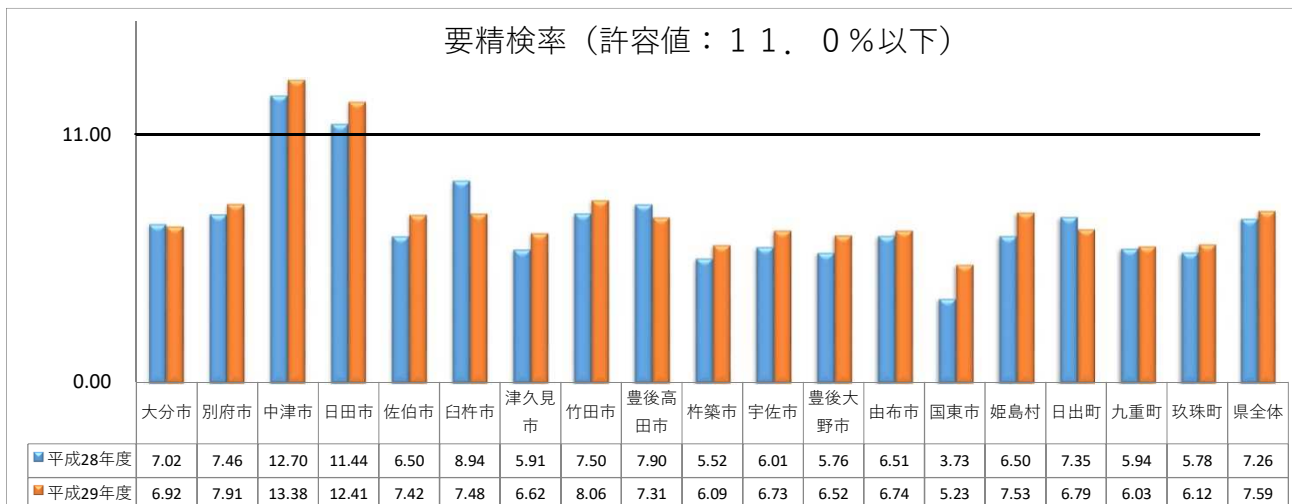
乳がん検診の対象者のうち、実際に受診した人の割合です。なるべく高いことが望ましいとされており、目標値は50%以上です。なお、居住市町村不明者については、除いているため、実際には記載している受診率よりも高い可能性があります。



## (2) 要精検率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

乳がん検診受診者のうち、精密検査が必要と判定された人(要精検者)の割合です。検診により、精密検査の対象者が適切に絞られているかを示します。0よりも大きく、一定の範囲内にあることが望ましい指標です。

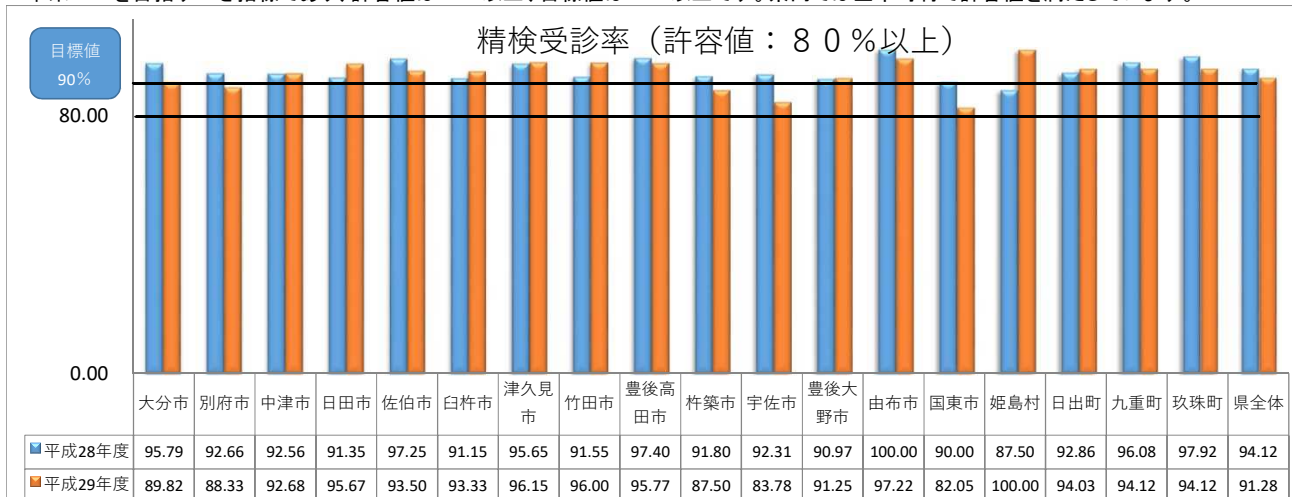
乳がんの許容値は11.0%以下ですが、有病率が高い地域(乳がんが多い地域)では高くなる場合があります。



## (3) 精検受診率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

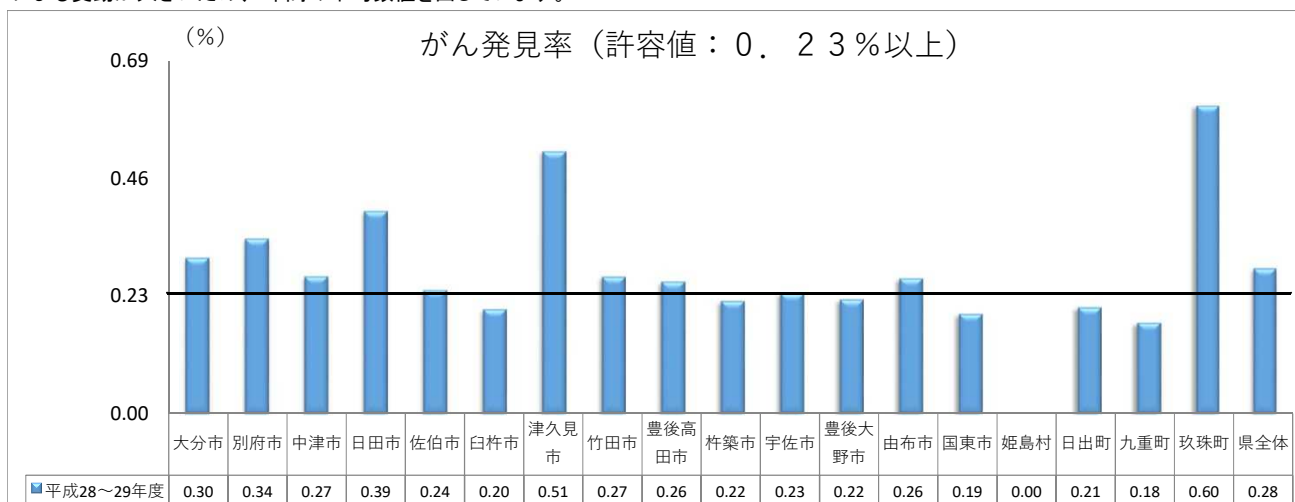
精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、精密検査を受けた人の割合です。要精検者がきちんと精密検査を受診したかを示します。

本来100%を目指すべき指標であり、許容値は80%以上、目標値は90%以上です。県内では全市町村で許容値を満たしています。



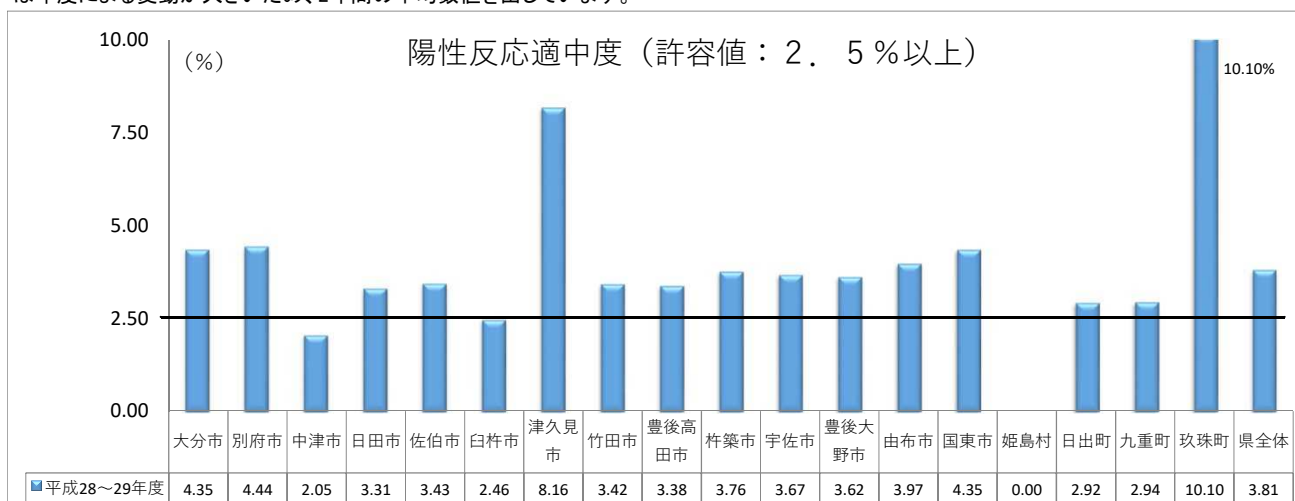
(4)がん発見率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

乳がん検診受診者のうち、乳がんが発見された人の割合です。適正な頻度でがんを発見できたかを示します。  
許容値は0.23%以上ですが、乳がん罹患の低い年齢層が多い地域では低くなる場合があります。また、受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいいため、2年間の平均数値を出しています。



(5)陽性反応適中度(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、乳がんが発見された人の割合です。検診で効率よくがんを発見できたかを示し、ある一定の範囲内であることが望ましいとされています。  
許容値は2.5%以上ですが、高濃度乳房や乳がん罹患が低い年齢層が多い地域では低くなる場合があります。受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいいため、2年間の平均数値を出しています。



※厚生労働省「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について」の許容値・目標値を評価基準としています。

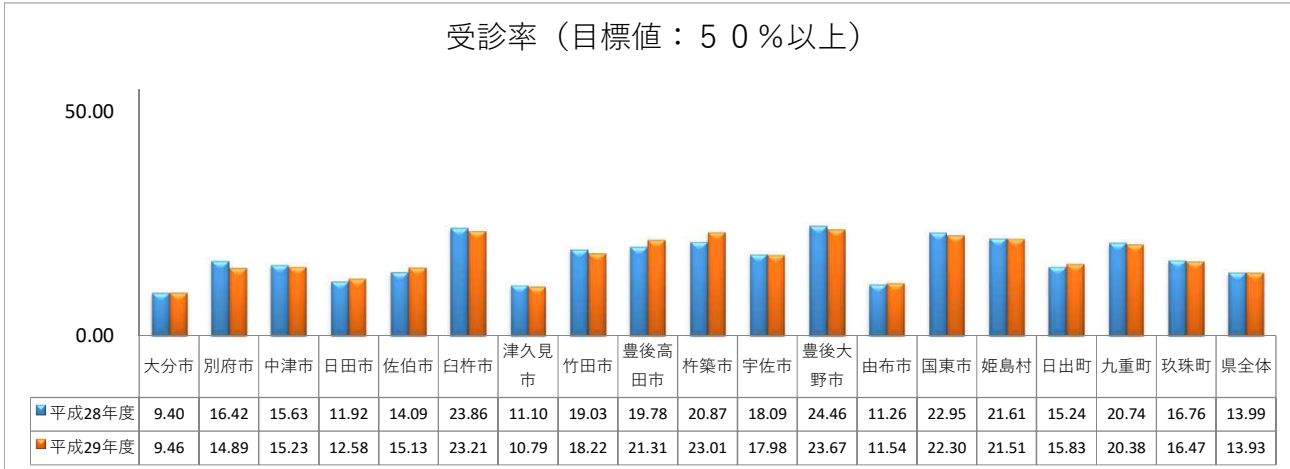


# 平成28年度、平成29年度 子宮頸がん検診精度管理指標数値の調査結果

※居住市町村不明分を除く

## (1) 受診率(市町村別集計/住民検診・職域検診総集計)

子宮頸がん検診の対象者のうち、実際に受診した人の割合です。なるべく高いことが望ましいとされており、目標値は50%以上です。なお、居住市町村不明者については、除いているため、実際には記載している受診率よりも高い可能性があります。

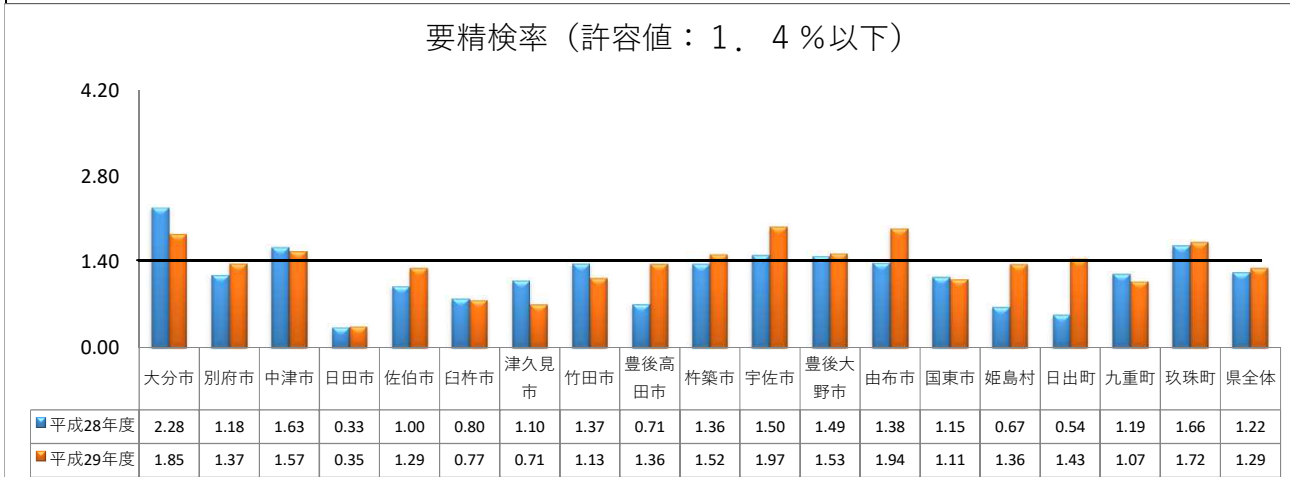


## (2) 要精検率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

子宮頸がん検診受診者のうち、精密検査が必要と判定された人(要精検者)の割合です。検診により、精密検査の対象者が適切に絞られているかを示します。0よりも大きく、一定の範囲内にあることが望ましい指標です。

子宮頸がんの許容値は1.4%以下ですが、子宮頸がんやCIN(注1)が多い地域では高くなる場合があります。

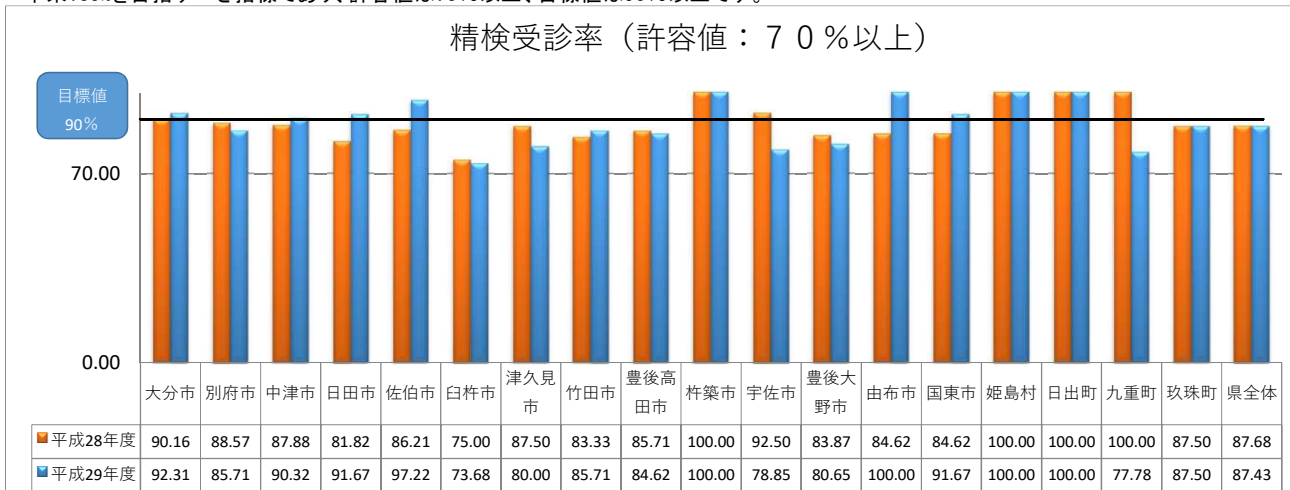
(注1) CIN(子宮頸がんの前がん病変)  
子宮頸がんはヒトパピローマウイルスのハイリスク型に感染した一部が子宮頸部上皮内腫瘍、または異形成と称される前がん病変となり、軽度異形成(CIN1)→中等度異形成(CIN2)→高度異形成(CIN3)と経て、子宮頸がんになります。ただし、ヒトパピローマウイルスの感染からがんになるまでには何年もかかり、CIN1やCIN2のほとんどはがんに進展せず、一部は自然に消えてなくなります。(引用 有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン・ガイドブック 2009年)



## (3) 精検受診率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、精密検査を受けた人の割合です。要精検者がきちんと精密検査を受診したかを示します。

本来100%を目指すべき指標であり、許容値は70%以上、目標値は90%以上です。

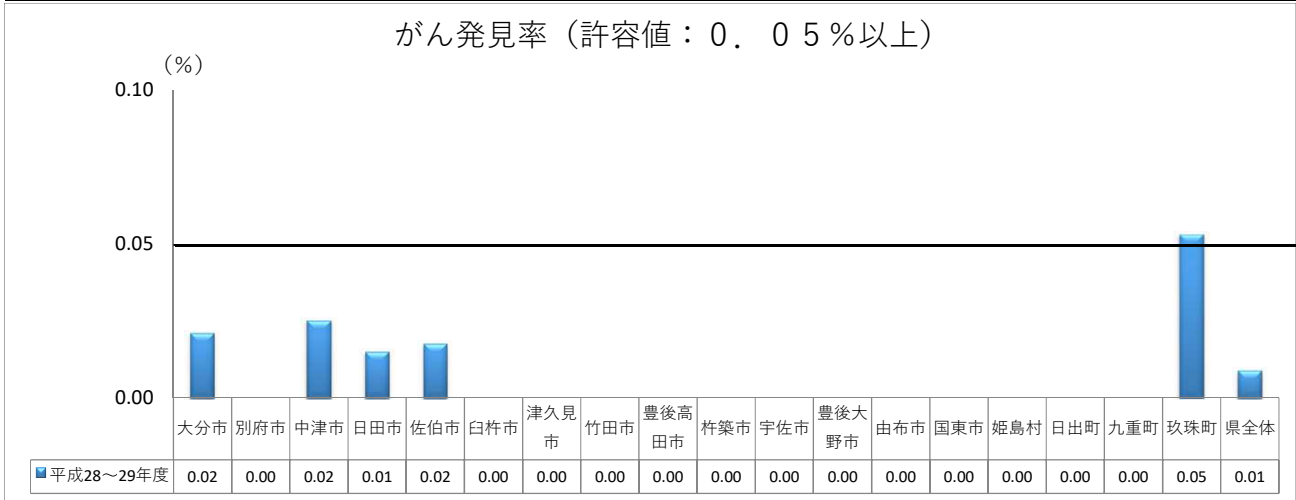


(4)がん発見率(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

子宮頸がん検診受診者のうち、子宮頸がんが発見された人の割合です。適正な頻度でがんを発見できたかを示します。ある程度(注2)高い方が望ましい指標です。

許容値は0.05%以上ですが、20歳代~30歳代前半の若年者の受診割合が大きい地域や、受診者が固定化している地域では低くなる場合があります。また、受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいので、2年間の平均数値を出しています。

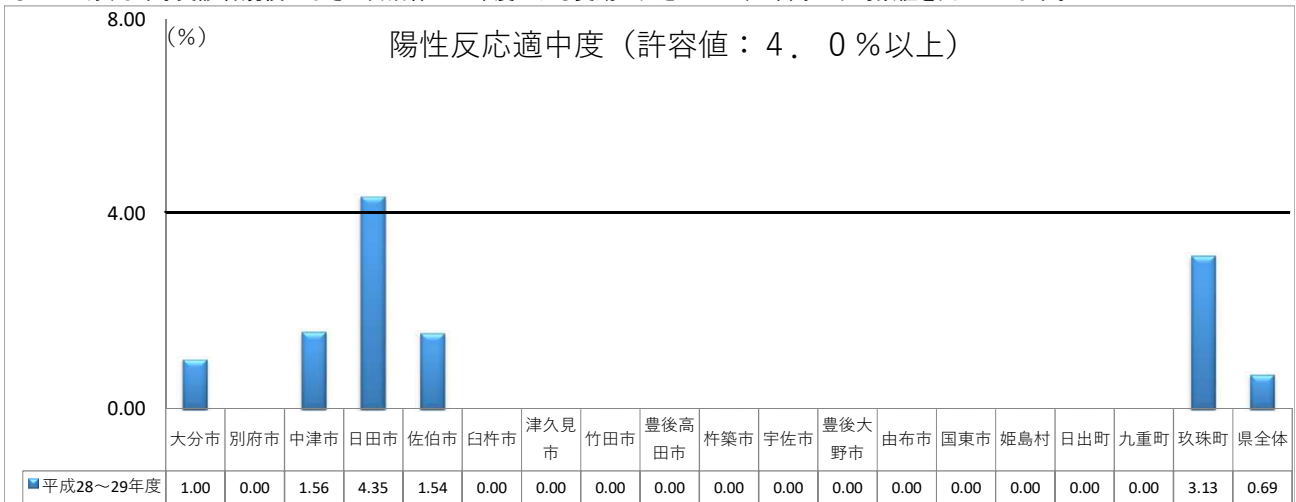
(注2)CINで発見された場合、「がん発見率」には反映されません。将来的にはCIN3以上の発見率も評価の対象になる可能性があり、今後国の許容値の見直しが行われる見込みです。



(5)陽性反応適中度(市町村別集計/住民検診 集団検診集計)

精密検査が必要と判断された人(要精検者)のうち、子宮頸がんが発見された人の割合です。検診で効率よくがんを発見できたかを示し、ある一定の範囲内であることが望ましいとされています。

許容値は4.0%以上ですが、若年者はCINの罹患は多いのですが浸潤がんの罹患が少ないため、若年者の受診割合が大きい地域では低くなる場合があります。受診者規模が小さい自治体では年度による変動が大きいので、2年間の平均数値を出しています。



※厚生労働省「今後の我が国におけるがん検診事業評価の在り方について」の許容値・目標値を評価基準としています。